

本日は、稀勢の里引退・荒磯襲名大相撲にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

また、この興行をご支援してくださいました日本相撲協会、さらには場所後のお忙しい時期に、ご協力をいただきました横綱・大関ほかの関取の皆様には厚くお礼申し上げます。

本日は、先代の師匠である鳴戸親方(隆の里)の誕生日でございます。偶然にも今日、断髪式が執り行われることになりましたのも、親方が弟子を温かく見守り続けた「縁」と稀勢の里が、親方の相撲道の精神を大切に守り続けた「縁」とがめぐり合わせたものだとは私思っております。本当に感慨深いものです。

稀勢の里は、中学校卒業後 15 歳で相撲の世界に飛び込みました。高校、大学で実績を積み、角界に入門する力士が多い中、ただひたすら一生懸命に稽古に励み、17 歳で十両に昇進し、史上 2 番目の若さで新入幕を果たしました。しかしながら、大関昇進の道のりは長く、入幕から 42 場所で、しかも鳴戸親方の死を乗り越えての大関昇進となりました。

優勝争いにからむことが幾度もありましたが、あと一步のところ
で惜しくも届かず、ファンにとっても、ましてや本人にとって辛抱の
時期が続きました。そんな時だからこそ、我々は稀勢の里を応援せず
にはいられませでした。そして一昨年 第 72 代の平成最後の横綱に
登り詰めました。

平成 29 年の初場所で初優勝、そして皆様の記憶にも残っているこ
とと思いますが、春場所での真っ向勝負で立ち向かった姿勢は、日本
中に感動を与えた名勝負でした。まさに、鳴戸親方が永平寺の貫首
秦 慧玉（はた えぎよく）禅師に頂き名付けた「作稀勢(稀なる勢い
を作す)」の言葉通りの大横綱となりました。

その後、胸から腕にかけての筋肉を痛めたことが致命傷となり、体
の限界がきて、ついにこの日を迎えることになりました。

力士にとりまして、国技館での断髪式を行うことは大変な名誉でご
ざいます。

先日、稀勢の里が私に、小学校のわんぱく相撲の大会で、生まれて
初めて国技館を訪れ、感動したことを今でも忘れられないと申して
おりました。その夢をかなえ、今日ここ国技館で土俵生活に区切りを

つけることは、稀勢の里にとりましても感無量なことです。そして、先代の鳴戸親方、全国のファンの皆様の想いをこめて、私にご入録(にゆうきょう)したいと存じます。

今後は、親方「荒磯」として相撲道の伝統を守り、協会の発展に努めていくこととなります。

皆様、引き続き稀勢の里・荒磯親方の応援を宜しくお願い申し上げます。

